

天理市萱生町 ヒエ塚古墳発掘調査現地説明会資料

天理市教育委員会文化財課

現地説明会日時	平成 29 年 2 月 19 日（日） 13:30 ～ 15:30
所在地	天理市萱生町
調査期間	平成 29 年 1 月 16 日～平成 29 年 3 月上旬（予定）
調査担当	天理市教育委員会文化財課 主任主事 村下博美

1. はじめに

天理市教育委員会では大和・柳本古墳群の基礎調査を継続的におこない、その保護と保存に取り組んでいます。このたび大和古墳群の基礎調査に伴いヒエ塚古墳の発掘を行いました。

2. ヒエ塚古墳の概要

ヒエ塚古墳は天理市萱生町に所在する全長約 130m の前方後円墳で、その一帯は古墳時代前期の古墳を中心に構成されている大和古墳群と呼ばれています。大和古墳群にはノムギ古墳、マバカ古墳、波多子塚古墳、下池山古墳の属する萱生支群と、中山大塚古墳、西殿塚古墳、東殿塚古墳の属する中山支群があります。その中でもヒエ塚古墳は萱生支群に属し同古墳群でも北端に位置しています。龍王山から延びる尾根上に前方部を西に向けて築かれており、同じ尾根上には東南にクラ塚古墳、東にノムギ古墳が築かれています。

3. 既往の調査

ヒエ塚古墳はこれまでに榎原考古学研究所による測量調査と発掘調査、天理市教育委員会による発掘調査がおこなわれ、今回が 3 度目の発掘調査になります。

榎原考古学研究所による測量調査と発掘調査 昭和 52（1977）年に測量調査を実施し、全長約 130m、後円部径約 60m の前方後円墳とされ、墳丘周囲に周濠状の地形を伴うと報告されています。その後、平成 14（2002）年度に古墳の北側で第 1 次調査が実施され、周濠の北側に外堤の存在を指摘したほか、古墳築造時に埋め戻されたと考えられる溝からは、庄内式期の土器が見つかりました。そのため古墳の築造時期が古墳時代前期前半に遡る可能性が示されました。

天理市教育委員会による発掘調査 平成 25 年度におこなった発掘調査（第 2 次調査）は、後円部の南側で実施し、葺石基底部と周濠、周濠のさらに外側に谷状の落ち込みが見つかりました。葺石基底部は地山面上に人頭大以上の石を設置し、それらの上面には拳大の石を墳丘斜面に沿って積み上げていることがわかりました。

4. 今回の調査成果

(調査進行中のため見解に変更が生じる可能性があります。)

後円部北側の状況を確認するため、南北に幅約2m、全長約29.5mの調査区を設定しました。

周濠について 幅約5.8メートル、深さ約50cmの周濠を確認し、南側とほぼ同規模の周濠が古墳の周囲を巡ることがわかりました。

葺石について 周濠の中には拳大から人頭大の葺石と思われる多くの石材が転落した状況を確認し、周濠内に落ち込んだ転落石を取り除くと基底石を検出しました。基底石には大きいもので幅約50cmの大型の石材を用いており、その上に石を積み基底面を構築している状況がわかりました。

後円部の大きさについて 今回の調査と第2次調査で見つかった基底石の位置から、従来想定していた大きさよりも約10m大きくなることがわかりました。直径は70m程度となる可能性があります。

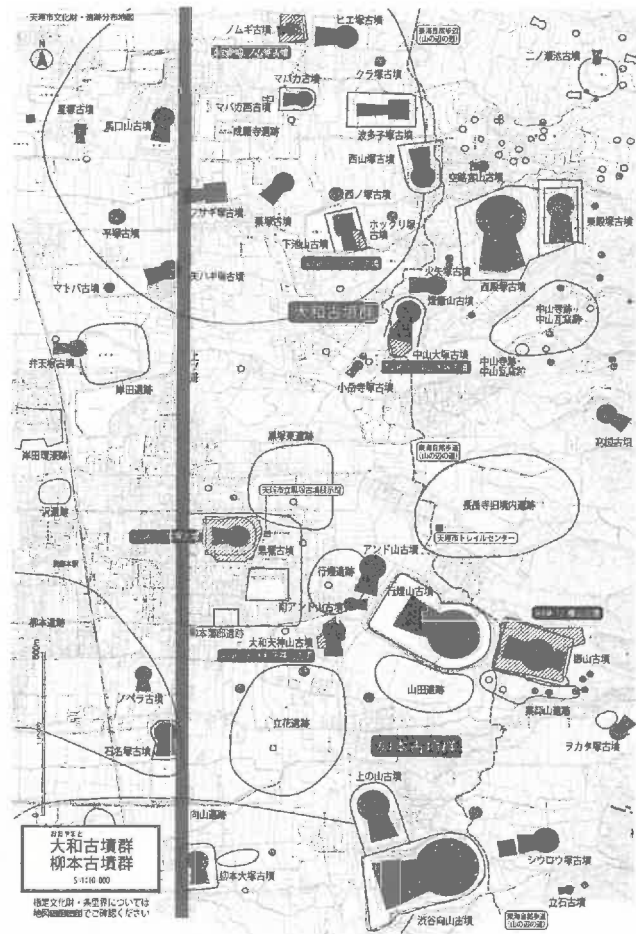
出土遺物について 周濠や墳丘の盛土から弥生時代後期～布留式期初頭の土器片が出土しています。周濠埋土上層からは土師器片や須恵器片が、周濠埋土の最下層からは土師器片のみが見つかっています。また今回やこれまでの発掘調査では埴輪は見つかっていません。そのため、ヒエ塚古墳は埴輪を持たない古墳である可能性が高まりました。

外堤について 第1次調査では調査地の地山が南側の畑よりも高いことから、外堤の存在が指摘されていましたが、今回の調査区では外堤状の高まりを検出しませんでした。

5. おわりに

ヒエ塚古墳は前方部が撥形に開く墳形や出土した土器の時期、埴輪が出土しないなど様々な要素から古墳時代前期前半の築造と考えられています。今回の調査結果を踏まえても築造時期に変化はなく、古墳時代前期前半の築造であると思われます。

今後も継続して大和古墳群の基礎調査をおこない、史跡指定を目指していきます。



■ 航空写真 (北西から)



■ 転落石と周濠 (南から)



■ 航空写真 (西から)



■ 航空写真 (北から)



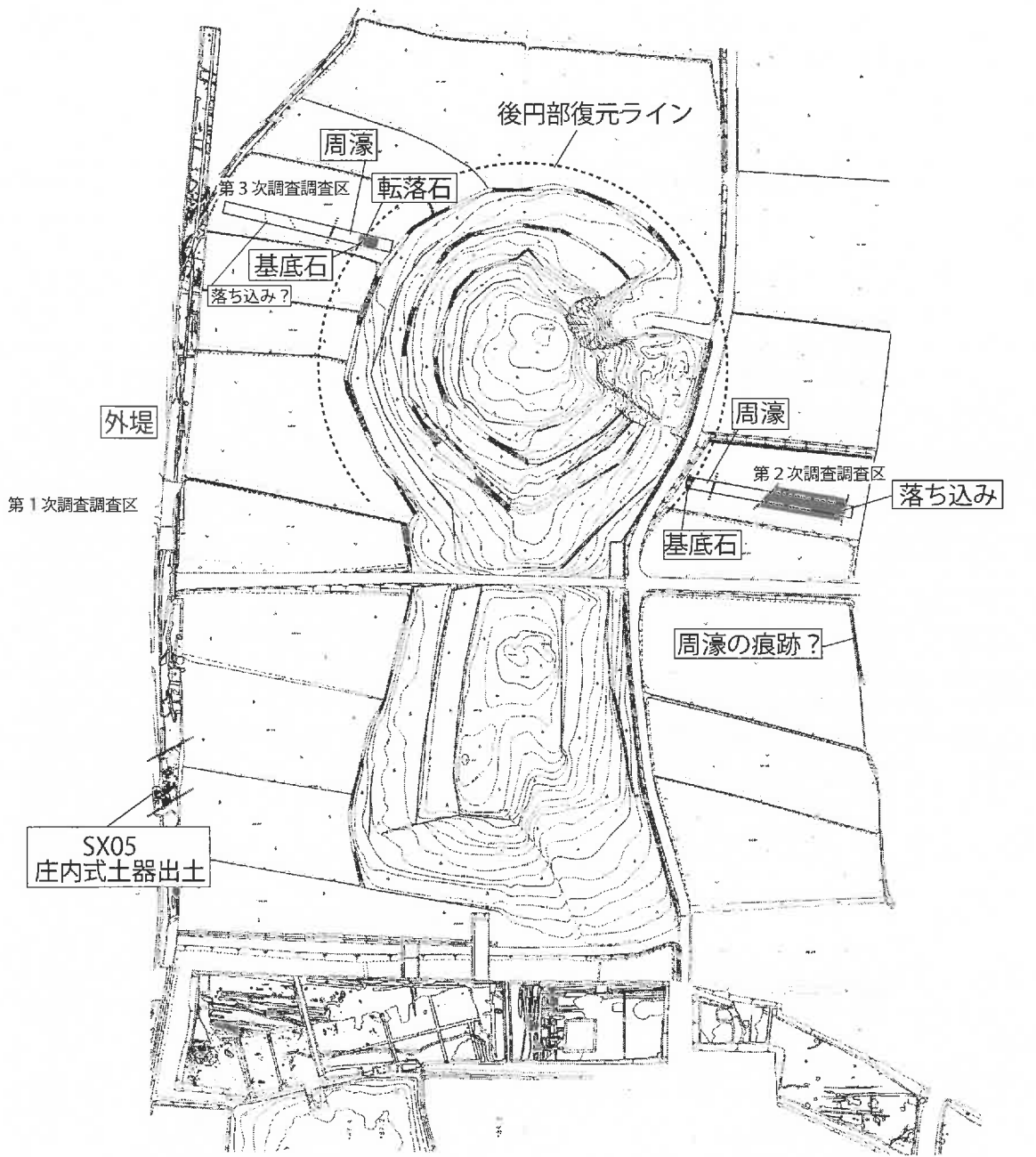
■ 転落石出土状況 (北西から)



■ 転落石出土状況 (北から)



■ 基底石出土状況 (北西から)



ヒエ塚古墳調査区配置図
S=1/1000